

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 5 月 19 日現在

機関番号：24201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26463532

研究課題名(和文) 新生児訪問において母親が「安心感」を獲得するための評価指標の開発

研究課題名(英文) Development of the Scale for Measuring Reassurance among Mothers Raising Infants

研究代表者

小林 孝子 (KOBAYASHI, TAKAKO)

滋賀県立大学・人間看護学部・准教授

研究者番号：70305671

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：安心は子育て中の母親から頻繁に聞かれる言葉であり、育児支援施策でも多用され、目指すものとされている。本研究の目的は、子育て中の母親の「安心感」を測定する尺度を開発することである。母親へのインタビュー調査、安心の概念分析、2段階の調査を経て、尺度開発を行った。尺度は、3因子「肯定感がある」「おだやかである」「周囲とのつながりがある」の35項目から構成される。開発した尺度は、信頼性・妥当性を有すると考えられた。

研究成果の概要(英文)：Reassurance is frequently used in relation to goals set for childcare support measures in Japan. This study aimed to develop a scale to measure reassurance among mothers raising infants. Semi-structured interviews, concept analysis of Reassurance, and two step studies were conducted. A scale which comprised 35 items and 3 factors were developed. The 3 factors are being able to assure oneself, being calm and placing trust in personal relationships. The developed scale was found to be reliable and valid for measuring reassurance among mothers raising infants.

研究分野：公衆衛生看護

キーワード：安心感 尺度開発 母親 乳幼児

1. 研究開始当初の背景

家庭訪問や育児相談の場において相談に応じていると、「安心しました」という言葉とともに母親の表情が和らぐ場面に出会ってきた。現代の子育ては孤立した環境や、溢れる情報の中で行われ、母親達は様々な困難や不安を抱えながら子育てをしていることが数多く報告されているが、その中で安心感を獲得することは母親にとって大きな意味があると考えられる。

わが国では急速な少子化が進み、様々な少子化対策が推進されているが、この対策の中で「安心」という言葉は多用されている。

また、子育てに関する研究では、1990年代より、満足感、肯定感、効力感など育児に関する肯定的側面を捉えた肯定的な概念が取り上げられるようになってきているが、「安心」という概念に着目した研究はみられない。

国外の研究の動向としては、スウェーデンにおいて、子どもを育てる母親の安心 reassurance についての研究等が散見されるが、社会背景や文化の相違、母子保健システムの相違が存在し、これらの結果をそのまま用いるには限界がある。わが国の母子保健に特化した中で母親の「安心」に着目したアプローチが必要とされる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、子育て中の母親の「安心感」を測定する尺度を開発することである。

家庭訪問や育児相談の場は、母親にとって「安心感」を獲得できる場であり、看護職は「安心感」を提供する役割があるといえる。この「安心感」を尺度化することは、看護職の実施する援助の包括的な評価指標となり、肯定的側面から捉えたより質の高いケアを提供するための指標として活用できると考える。

なお、研究開始当初は新生児訪問を受けた母親を対象としていたが、対象者数の確保が難しい状況となり、看護職の関わりが多い乳

幼児（乳幼児健康診査を受診する年齢の子ども）をもつ母親を対象とすることとし、新生児訪問を受けた母親にも適用可能な尺度を開発することを目的とした。

3. 研究の方法

1) インタビュー調査

平成26年度、「安心感」の構成要素を明らかにするために母親へのインタビュー調査を実施した。新生児訪問は育児不安が最も高い時期であると報告されている生後4か月までに実施されることが多く、本調査でも市町村で実施される4か月児健康診査でのインタビュー調査を予定していた。しかし、健診場面での実施が難しく、データ収集施設を変更し、地域子育て支援拠点事業（広場型）の施設に来所した母親を対象としてインタビューを実施した。研究協力者は、施設に来所した母親28名である。母親の年齢は25～43歳、子どもの年齢は0歳2ヶ月～3歳9ヶ月であった。データ収集は、インタビューガイドを用いた半構成的面接調査を実施し、逐語録を作成した。分析は内容分析の手法を参考にし、得られた結果を研究協力施設の職員に了解が可能であることを確認した。インタビュー調査は、所属大学の倫理委員会の承認を得て実施した。

2) 構成概念の検討と尺度案の作成

平成27～28年度、ハイブリッドモデルにより「安心」の概念分析を行った。明らかにした構成概念を基に、アイテムプールの作成、項目の選定、尺度原案を作成した。

3) 予備調査

尺度原案の信頼性と妥当性を検討し、尺度項目を決定することを目的に、予備調査を実施した。A市保健センターで開催された4か月児から3歳児までの健康診査において尺度原案を267名に配布し、206名から有効回答を得た（有効回答率77.2%）。得られたデー

タより項目分析を行い、さらに構成概念妥当性、内的整合性を検討した。

倫理的配慮として、書面および口頭で、研究参加の任意性、匿名性、参加しない場合でも支援内容に影響しないことを説明した。質問紙への回収をもって同意を得られたとした。所属大学の倫理委員会の承認を得て実施した。

4) 本調査

開発した尺度の信頼性と妥当性を検討することを目的に、本調査を実施した。B市保健センターで開催された4か月児から3歳児までの健康診査において自記式質問紙を330名に配布し、286名から有効回答を得た(有効回答率86.7%)。倫理的配慮は予備調査と同様であり、所属大学の倫理委員会の承認を得て実施した。

4. 研究成果

1) インタビュー調査

安心感をもたらす要因として、そばに誰かがいてくれる 子どもをみてくれる人がいる 話を聞いてくれる人がいる みんな同じだとわかる これでよいと思える いつでも頼れるところがある 見通しをもてる というカテゴリーが明らかにできた。また、安心感を構成する要素として、ほっとする 楽になる というカテゴリーが明らかにできたが、言語化しにくいという声や、曖昧な内容も多かった。安心感そのものについても具体的なデータを蓄積していくことが課題として残された。

2) 構成概念の検討と尺度案の作成

概念分析を行った結果、安心の定義を「人が求めるものであり、主観的なもの。穏やかで自分を肯定しており、人とのつながりや見通しがあること。」とした。構成概念は、「おだやかである」「不安がない」「肯定感がある」

「自信がある」「周囲とのつながりがある」「見通しがある」とした。

明らかにした構成概念を基に、アイテムプールを作成し、健康診査での待ち時間に記入が可能であると思われる35項目を選定し、下位項目として尺度原案を作成した。

3) 予備調査

対象の母親の年齢は、10歳代1人(0.5%)、20歳代44人(21.4%)、30歳代134人(65.0%)、40歳代27人(13.1%)であった。子どもの数は、1人が79人(39.0%)、2人以上が122人(61.0%)であった。

まず項目分析を行い、天井効果の検討により7項目、項目間相関分析により1項目、I-T相関分析により2項目、G-P分析により1項目除外した。次に、主因子法、Promax回転により構成概念妥当性を検討した。因子負荷量0.4以上を示し、かつ複数の因子に0.4以上の負荷量を示さないことを条件に、因子の解釈可能性を検討しながら項目を採用した。最終的に13項目を原案修正版とした。修正版は3因子で構成され、第1因子より順に「肯定感がある」「おだやかである」「周囲とのつながりがある」と命名した。3因子の累積寄与率は55.8%であった。信頼性係数は、全項目でCronbach係数が0.92、下位尺度でのCronbach係数は0.85~0.84であった。

作成した原案修正版は、構成概念妥当性、内的整合性が確保できており、子育て中の母親の安心を測定できる有用な尺度として、本調査において対象者数を増やし、信頼性および妥当性を検討するに値すると考えられた。

4) 本調査

尺度の信頼性と基準関連妥当性を検討した。Cronbach係数は0.904。基準関連妥当性については、主観的幸福感尺度(伊東ら2003)を使用し、Pearsonの相関係数0.524($p < 0.01$)と高い相関が認められた。開発し

た尺度は、信頼性・妥当性を有すると考えられた。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

小林孝子、安心に関する文献検討 子育て中の母親への適用に向けて、人間看護学研究、査読有、No.15、2017、41 - 51

〔学会発表〕(計 3 件)

Takako Kobayashi, Aya Baba. A descriptive study on feelings of relief among mothers raising infants. The 3rd KOREA-JAPAN Joint Conference on Community Health Nursing. July, 2016. Busan, Korea.

Takako Kobayashi, Aya Baba. Concept Analysis of Reassurance among Mothers Raising Infants: Development of a Hybrid Model. Asian American Pacific Islander Nurse Association's 14th Annual Conference. March, 2018. Honolulu, Hawaii.

小林孝子・馬場文、乳幼児を育てる母親の安心を測定する尺度の開発 尺度項目決定のための予備調査、第6回日本公衆衛生看護学会学術集会、2018年1月、大阪

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小林孝子 (KOBAYASHI, Takako)
滋賀県立大学・人間看護学部・准教授
研究者番号：70305671

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()